



Ⅱ. 金沢の 伝統工芸

(1) 工芸都市としての金沢

工芸都市としての金沢の特徴は、歴史的なまちなみ景観の中に、数多くの職人工房が集積し、伝統的な生活様式の中で、今なお、工芸品が日常生活の中で愛用されていることである。その背景には、江戸時代以降の加賀前田藩の工芸振興がある。

「百万石文化」を確立した三代藩主・利常は城内に御細工所を開き、京都と江戸から名工を指導者として招いて金工・漆工などの藩主用の工芸職人を養成し、五代藩主・綱紀は、さらに、その秘伝の技を「百工比照」にまとめた。

「百工比照」は、綱紀が収集し自ら名付けた工芸各分野にわたる製品や技法についての集大成で、一部の資料には産地や呼称などが記され、明確に整理分類されている点に大きな特色がある。資料は材質・用途・形態別に二つの箱に納めて保管されており、釘や真珠などは和紙に一括して包まれている。正確な総点数を数えることは難しいが、二千点以上の数になるといい、国の重要文化財に指定されている。

百の巧みの技術を集め、比べて照らしてみるという創造を刺激する「場」を前田藩が提供し、様々なチャレンジをさせてきたことが、多様な工芸が発展するための基盤を創ってきたのである。藩主のお抱え職人たちは、後に町方においても仕事をし、その工芸品は家臣や町民の間にも普及し、彼らの生活の質を高めることに貢献した。

城下に住む武士、工芸職人や町衆の間には、百万石文化の華ともいえる茶道や能が奨励され、能舞台や茶室を備えた住宅が数多く存在し、独特の景観を維持している。また、寺内町の歴史を踏まえて信仰心が厚く、雪国の風土に根付いた伝統的町家には職人の技を生かした仏壇や欄間など独特の室内装飾が施され、城下町の文化景観と伝統芸能、そして伝統工芸とが一体となって維持されている。現存する主な伝統工芸は22種類にのぼり、その多彩さは京都を凌ぎ、また、吉田三郎（彫刻、日本芸術院会員）、松田権六（蒔絵、文化勲章受章、日本芸術院会員）、高光一也（人物画、文化功労者、日本芸術院会員）、赤地友哉（髹漆、重要無形文化財保持者）、木村雨山（友禅、重要無形文化財保持者）、氷見晃堂（木工芸、重要無形文化財保持者）、羽田登喜男（友禅、重要無形文化財保持者）、寺井直次（蒔絵、重要無形文化財保持者）、蓮田修吾郎（鑄金、日本芸術院会員）、大樋長左衛門（年朗）（陶芸、文化功労者、日本芸術院会員）、村田省蔵（洋画、日本芸術院会員）、大場松魚（蒔絵、重要無形文化財保持者）、魚住為楽（安彦）（銅鑼、重要無形文化財保持者）、中川衛（彫金、重要無形文化財保持者）などの重要無形文化財保持者（人間国宝）や日本芸術院会員を輩出している。なかでも伝統工芸である陶磁、漆・木工、金工、染織の分野においては、多数の作家が全国的に活躍し、金沢の人口1人あたりの重要無形文化財保持者（人間国宝）の数は、東京や京都を凌ぎ日本一の水準であり、まさに日本を代表する工芸都市と言ってよい。

(2) 主な伝統工芸品

以下に、代表的な工芸を紹介してみよう。

まず、国の伝統工芸品産業の振興に関する法律に指定された業種である金沢箔、金沢漆器、加賀友禅、九谷焼、加賀繻、金沢仏壇から見ていこう。

(金沢箔)

金沢箔のはじまりは、加賀藩の藩祖前田利家が1593年に金、銀箔の製造を命じた文書が残っていることから、それ以前には、箔の工人がいたと考えられており、その後、前田藩による煌びやかな武家文化の確立とともに、金沢の箔需要が高まり、江戸時代初期に多くの箔打ち職人が金沢に招かれ、興隆していったものと考えられる。しかし、江戸幕府は金銀の取締りを厳しく行い、17世紀末には、金箔



箔移し

は江戸、銀箔は京都の箔屋以外での製造が許可されなくなった。以降、金沢では禁じられていない真鍮箔の製造や江戸、京都から購入した金銀箔の打ち直しなどにより製箔技術が伝承されてきたが、江戸時代後期にいたって、金箔打ちの公認を求める職人たちの粘り強い運動により、藩の御用箔に限り、金沢での製造が許可されることとなった。

明治時代に入ると、製箔の統制はなくなり、幕府の庇護下にあった江戸での金箔作りが完全に途絶える一方、金沢の高度な箔打ち技術や製箔に適した気候や水質などによる金沢箔の品質が全国に認められていった。さらに、金沢の箔業者・三浦彦太郎の創案により箔打機が完成し、金沢は金箔産地として急速な発展を遂げ、現在では全国生産高のうち金箔は98%以上、銀箔・洋箔においては100%を占めている。

金沢箔は3つの特性「酸化しない、変色しない、腐食しない」を活かし、仏壇や金屏風、西陣織、漆器など、多くの工芸品や美術品などに欠くことのできない資材として広く活用されている。さらに、近年は生活様式の変化に対応して、異業種交流をおすすめインテリア用品、地酒や菓子などの食料品、さらには化粧品にまで幅広い用途が開拓されている。

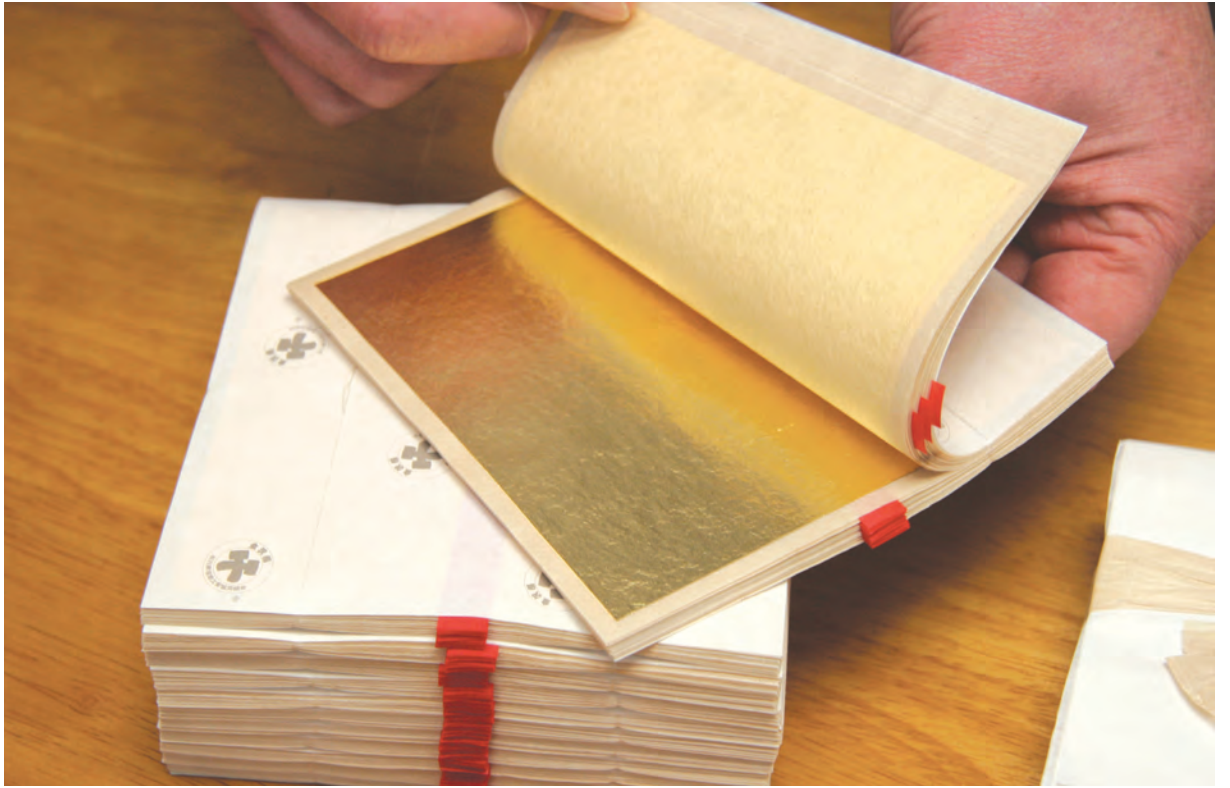


箔打ち

金沢の金箔は世界遺産の修復にも用いられており、1987年に修復された京都金閣寺においては金沢箔が約20万枚、毎年補修がなされる日光東照宮においてはその都度約2万枚が使用されている。これらの世界遺産も、金沢で伝承されてきた箔打ちの技術に高質な金箔を生み出さうる金沢の風土があってこそ、字義通り、輝けると言えるだろう。



金沢箔を使用した工芸品



金沢箔

(金沢漆器)

金沢漆器の最大の特徴は、高度に発達した蒔絵技法による華麗で精密な文様であり、室町時代に将軍家に仕えた蒔絵の名門・京都五十嵐家の五十嵐道甫、さらに、江戸の名工清水九兵衛を三代藩主・利常が招いたことにより、その基礎がつけられた。

このようにして加賀藩によって育成された金沢漆器には、さらに、金や銀の板金を漆に貼り付けた後に研ぎ出し文様を浮かび上がらせる“平文”や、貝殻をはめ込む“螺鈿”、

卵の殻により白色を出す“卵殻”など漆器の加飾技法のすべてが伝えられており、中世以来の蒔絵技法の本流を受け継いだ貴族文化の優美さとともに、力強い武家文化を兼ね備えた独特の漆工芸として発展してきた。これらの技術は御細工所や町方の門人、師弟に伝授され、江戸、明治、大正、昭和を経て今日まで継承されている。

また、金沢漆器は、大量生産ではなく、室内調度品や茶道具などの一品制作を特徴としている。現在は、蒔絵師が大半を占めており、今後は木地師の育成が必要になっている。



作業風景



金沢漆器

(加賀友禪)

加賀友禪は室町時代、加賀地域の独特の技法であった梅の木を材料にした梅染めに遡る。その後の赤梅染め、黒梅染め、加賀憲法染め、色絵紋とともに加賀御国染めとして一世を風靡し、これらの染織技術が源流となり、1712年頃、京都で扇絵師として、また、きものの雛形本の図案を描いていた宮崎友禪齋が加賀に移住したことから、友禪染の基礎が築かれた。



加賀友禪

図案の作成から始まる幾多の制作工程は、すべて職人たちの手仕事によるもので、その特徴は、友禪五彩といわれる臙脂、黄土、深緑、藍、古代紫を基調にした配色により、草花、風物、名所を題材に絵画的表現が息づき、力強くも上品な落ち着きを持っている。また彩色において、補色等の組み合わせを生かしたコントラストの強い色変わりの手法や、葉っぱが虫に食われた状態を表した「虫食い」と称する手法も、観察から生まれた自然美表現の特異なもので、アクセントとしての効果を持っている。狩野派の流れをくみ、草花を中心とした写実的な絵画調の絵柄は、京友禪の紋様的な画風とは対照的である。

工程は手作業によるところが多く量産には不向きであるが、作家の目が行き届くと同時に作家の個性が十分に発揮され、一点一点に温かい手書きの趣がある。金沢の風物詩である仕上げ工程の友禪流しは、生地についている糊や余分な染料を清流の中で洗い流し、友禪の特徴である白い糸の様な輪郭線が模様を浮き上がらせ、加賀友禪の美しさを一層引き立てている。

加賀友禪は近年のポストモダンから本物志向としての加賀調の色調や手法に評価が高まり、京友禪より高いブランド力を有し、不況の中でも健闘してきた。京友禪が大量生産に向かっている頃、加賀友禪はいち早く「落款制」を取り入れ、作家による一貫生産システムを確立し、文化性の高い独創性溢れる生産を軌道に乗せたのである。現在落款を保持している作家は228名であり、後継者も多く、売上額のピークは1997年に180億円を記録した。近年では加賀友禪の技法を応用し、和装小物、インテリア、洋服などの分野で商品開発も進められている。



彩色の作業風景



浅野川の友禅流し

(金沢九谷焼)

金沢九谷焼の起源は、加賀藩が1806年に、すでに約150年前に廃窯となっていた古九谷窯に代わり、九谷焼を再興しようという目的で、十一代藩主・斉広の時、技術者として京都青蓮院の御抱窯として名高い陶工、青木木米を招くことで始まり、木米は翌年（1807年）春日山木米窯を築窯した。木米窯の製品は青磁・赤絵金彩・宋胡録・南蛮・高麗・仁清等に倣ったものと、木米創案のものがあり、木米が金沢を去った後、加賀藩士武田秀平の呼びかけで、民山窯が開窯し、赤絵九谷の元祖となった。

金沢九谷は細密画と盛絵具と、独特の赤を特徴とし、赤絵金彩、金襴手、花詰、細字における細かな筆遣いは、豪華な気品や風格を感じさせる。

九谷焼の魅力である鮮やかな絵柄は、時代とともに次々と新しいデザインが生まれ、今日では、それらのデザインをもとに、多くの作家が活躍している。



金沢九谷焼

(加賀繡)

加賀繡は、室町時代初期に、加賀地方への仏教の布教とともに、主に仏前の打敷（うちしき）や僧侶のお袈裟（けさ）など、装飾の技法として京都から伝えられ、藩政時代に入ると、藩主の陣羽織や装飾品などに施され、奥方たちの着物にも用いられるようになった。さらに、友禅染めの発達とともに、染模様を際立たせるために、より高度な技法が求められ、学術文化を重んじ奨励した歴代藩主の手厚い保護により、「加賀の金箔」「加賀の友禅」と並ぶ「加賀の繡」として、独自の発展と完成を遂げた。

その特徴は、絹糸や金糸、銀糸を巧みに使って立体感のある図柄を浮かび上がらせるところにあり、繊細な技術を駆使し、ひと針ひと針丹精につくられ、「ひとつ限りのもの」として喜ばれ珍重されている。また、近年は、さまざまな日常雑貨やタペストリーなどにも加賀繡が活用されている。

また、石川県加賀刺繍協同組合が復元した前田利家の正室まつが繡いをされたと伝えられる利家の陣羽織は、大きな話題となった。陣羽織の復元に伴う制作活動は、糸を草木で染めるところから始まり、前後ともに豪華な加賀繡が施されている。



加賀繡

(金沢仏壇)

金沢では、蓮如上人の布教活動により、各戸での本尊安置を奨励する浄土真宗（一向宗）が庶民の生活に深く根をおろしており、他の地域に比べて仏壇の需要が極めて高まり、それに応えたのが、三代藩主・利常が開いた御細工所に江戸や京都から呼び集められ美術工芸の基礎を築いた名工の流れを汲んだ職人たちである。



金沢仏壇

そもそも仏壇は、寺院の本堂を模したものであり、その制作には、木工をはじめとして、あらゆる工芸技法が駆使されている。特に、金沢では、木地師、塗師、蒔絵師、彫刻師、金具師等の分業体制で制作が行われ、金箔の生産地でもあったことから、金箔をふんだんに使い、伝統工芸の集大成的、荘厳華麗な金沢仏壇が作られるようになった。



作業風景

近年は、生活様式が多様化していることもあり、消費者のデザインによる仏壇や、仏壇と多目的スペースとを組み合わせた回転式の「からくり仏壇」、設置場所や宗派にあわせた新型家具調仏壇も制作され、今の生活にあわせた商品の開発も行われている。また新たに、江戸時代など古くに制作された伝統的な仏壇の写真をデータベース化し、見たい時にすぐに取り出せるようにするといった試みも展開されている。

次に、国の伝統工芸品産業の振興に関する法律には指定されていないが、金沢の代表的な伝統工芸品を、幾つか見ていこう。

(加賀象嵌)

象嵌は刀装具などに用いられる金属加飾法で、武家にとっては欠くことのできない技能であり、前田家においても江戸時代初め、二代藩主・利長が京都金工宗家の後藤琢乗を招聘し、技術の導入を図った。さらに、武家社会の制度的要請として、単にその技を根付かせるだけではなく、加賀藩の金工を司る体制が確立され、金沢で象嵌技術は高度な発展を遂げていった。

特に、加賀象嵌の施された馬具の鐙は、金銀材を打ち込む溝の底部を開口部よりやや彫り広げる平象嵌の技法により、どのような衝動にも剥がれ落ちず、精巧で優美な意匠とあいまって、天下の名声を博した。

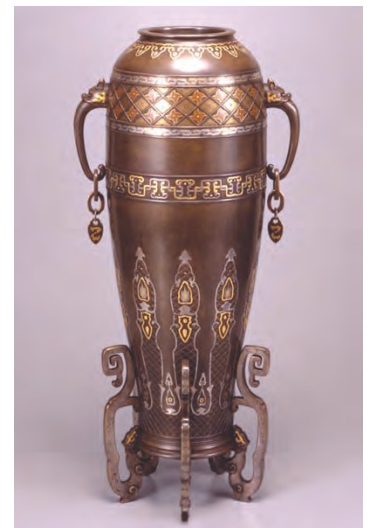
さらに、美術工芸品としての加賀象嵌の評価は国内のみならず、日本が万国博覧会に出品を始めた1871年のウィーン万国博覧会以来、世界的なものとなり、優れた作品は各国の美術館に収蔵されることとなった。



加賀象嵌が施された鐘

例えば、右の写真は加賀象嵌の名工、山川孝次の手によって製作された青銅鑄製、胴、両脇の耳（把手）、五脚からなる花瓶であるが、優れた技法とデザインとが融合した名品で、明治天皇よりアメリカのグラント將軍婦人に贈呈されて、現在ワシントンのスミソニアン博物館に収蔵されている。

初代山川孝次は文政11（1828）年金沢に生まれ、「加賀宗珉」と呼ばれるほどの名工として知られ、明治政府から命じられて、ウィーン万国博覧会に出品する作品を完成させ、1876年フィラデルフィア万国博覧会では「銅器」の出品で受賞している。



金銀象嵌環付花瓶
（きんぎんぞうがんかんつきかびん）

（大樋焼）

1666年、五代藩主・綱紀が京都から招いた茶道裏千家四代・千宗室・仙叟に同道した楽家四代・一入の高弟であった陶工・初代土師長左衛門が伝えた楽焼が大樋焼の始まりである。長左衛門は、近隣に良質な土が見出された大樋村に窯を開き、藩の焼物御用を務め、仙叟の指導の下、力強く雅趣に富んだ造形に渦文や水波紋などの意匠を凝らした侘びを体現する茶道具を創作した。

ロクロを用いずに手捻りによる造形、釉薬が溶けているときに窯から引き出す独特の焼成、そして、京都楽焼の黒焼とも赤焼とも異なり茶の鮮やかな緑を引き立てる飴色の釉薬が大樋焼最大の特色である。

その後大樋焼歴代は代々藩主の御用窯として大樋焼の制作を続けてきた。大樋焼の制作活動は、明治維新後、民間の窯元として生業を立てざるを得なくなったことや、当時の茶道の衰退と重なって、苦難の時期を迎えたが、茶道の復興とともに隆盛を極め、現在は、十代長左衛門（文化功労者・日本芸術院会員）が当主となり、伝統と現代を両立させ、茶道界のみならず一般にも広く親しまれるようになった。今日、江戸時代からの歴史を持つ楽焼は、京都の楽家と金沢の大樋焼だけであり、大樋焼は全国的に高い評価を得ている。



大樋焼

(加賀毛針)

加賀毛針は、加賀藩が、地勢を知るといふ軍政上の理由で、武士だけの特権として奨励していた鮎釣りから製法が確立されていった。すなわち水中で鮎の興味をそそるため、緻密な技巧により、時と場合に見合った虫類の形姿や虹彩を色とりどりの羽毛で表す様々な工夫が施されていったのである。現在では、その繊細な技を生かしたコサージュなど華やかなアクセサリも製作されている。

(加賀水引)

水引は、金封や贈答品に掛け結ばれる日本特有の結びひもであるが、金沢の水引細工の特徴は、折らずにふっくらとさせた形姿の美しさにある。単に包みに装飾的に掛け結ぶ機能に加え、自在な造形素材としての性格も併せ持つのである。婚礼の結納など祭礼行事には欠かせない伝統の技であり、今でも生活の中で息づいている。



加賀毛針



コサージュ



加賀水引

(郷土玩具)

郷土玩具は、その地域の習俗が反映されて、庶民の信仰や縁起が託された愛玩のための細工であるが、手軽な観光土産としての要素も大きく、人気の高いものは産業化して発展してきた。金沢で最も技巧的な郷土玩具の「獅子頭」は、江戸時代、武芸錬磨を兼ねて奨励されてきた獅子舞に用いる巨大な獅子頭のミニチュアであり、桐の白木作りで、角や歯は金箔押し、口中や鼻腔は朱に塗られて豪壮な雰囲気が出ている。さらに牡丹唐草の友禅染胴衣を伴うものは高級感が漂う玩具である。



郷土玩具(獅子頭)



獅子舞

(二俣和紙)

二俣和紙は、金沢市街から山間部に入った二俣地区で江戸時代から藩御用の料紙として作られ、藩の保護下で奉書紙や檀紙等の公用紙を中心に、質量ともに群を抜く加賀の和紙生産地として発展してきた。現在では、高級和紙としての新たな需要もあり、名刺やレターセットなど新たな商品も生まれている。



二俣和紙



二俣和紙

(伝統工芸の特徴)

ここで、金沢の伝統工芸の特徴をまとめると、

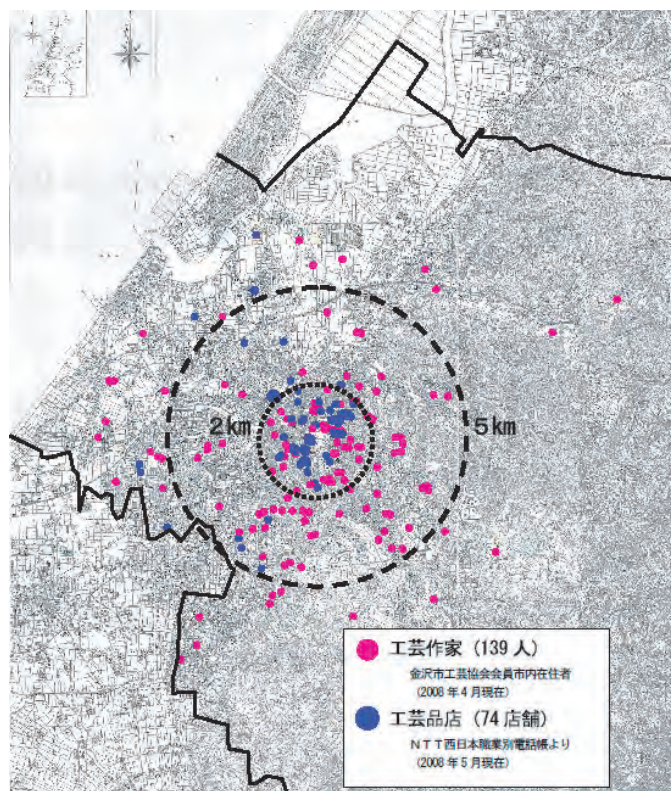
第1に、加賀地域に伝来の素材、技術に、先進地であった京都のデザインや技法などを導入し、融合しつつ、独自の領域を確立してゆき、京都よりも高い評価を受けるに至り、日本を代表する工芸を擁していること、

第2に、加賀・前田藩の支援を受けて、武家文化独特の豪華さや華やかさ、さらには寺内町の歴史を刻んだ町衆の厚い信仰心などを背景とした繊細さの両面をもつ、加賀調のデザインが確立されていること、

第3に、現在に至るまで、市民のくらしの中に工芸品が活かされ、生活の質を高めているのみならず、今日の産業においても、工芸的生産や職人的なものづくりの精神が生かされていること、

の3点に集約される。

また、このような特徴をもった金沢の伝統工芸を支える工芸作家や工芸品店は、次の図に見られるように、金沢城址を中心とした半径約2 kmの旧城下町区域に約6割、半径5 kmまで広げるとその約9割までもが所在しており、市内中心部にまとまりのある分布となっている。



地域の工芸作家・工芸品店